



(上) コロジオン溶液の生成には、96%のウォッカなどを使用する。(下) 湿板写真を撮影する過程で薬品の色素が沈着した和田さんの手。

ビートたけしを湿板で撮る

ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール
によって実用的写真技法が確立されて
から二世紀弱。その間、撮影から現像
に至るまでのプロセスは飛躍的な進歩
を遂げてきました。像を写し出す媒介
は、銀板からガラス板、ガラス板から
銀塩フィルムへと移り変わり、現代で
はデジタルデータへと置き換えられて

います。合理化、簡略化の過程で淘汰
された古来の技術は、継承する者が絶
えれば永遠に失われ、忘れられてゆく
ことでしょう。

今回 Kooba では、一八五一年に発
明され、のちに坂本龍馬など歴史上の
偉人たちの撮影にも用いられた「湿板
(コロジオンプロセス)」と呼ばれる手
法でビートたけしさんを撮りおろしま
した。この撮影法ではコロジオン溶液
を塗布したガラス板をフィルムとして
使用するため、薬品の調合やわずかな
気温の変化によって写真の出来が大き
く左右されます。熟練の技術と経験が
なければ像を写し出すことすら難しい

湿板は、安定や同調や予定調和や大量
生産とは対極に位置する、前時代のク
リエーションを象徴する写真技術と言
えるでしょう。

撮影にご協力いただいた和田高広さ
んは、湿板写真に魅了されて以来、一

五〇年以上前の写真家たちが残した技
術を蘇らせるべく撮影法を研究し続け
てきました。フィルム代わりとなるガ
ラス板にコロジオン溶液を薄く広げ、
硝酸銀溶液に浸けたのち、板が乾かな
いうちに撮影、そして現像。一枚の写
真を現像するまでには、短く見積もっ
ても一〇分は要します。約五〇分の撮
影で現像されたたけしさんの写真はわ
ずか四枚。デジタルカメラであれば数
秒たらずで撮り終える枚数ですが、こ
こにある四枚の湿板写真には、デジタ
ルがもたえない物質としての確かな重
みがあります。

今回撮影した写真は、薬品による像
のムラを可能な限りそのままに残し、
本誌の表紙に使用しました。合理化さ
れた現代の写真技術では再現しえない
質感を、読者のみなさんも存分にお楽
しみください。



Ⅲ 写真技術の究極

19世紀に発明され人々を夢中にさせたダゲレオタイプ、湿板写真……。
複製不可能の一枚一枚には、数千万の画素数を誇る
デジタルカメラでも再現できない、究極の写真世界がある。

この続きは本誌でどうぞ！

Kooba編集部